

サハリン樺太史研究会
2014年度活動報告書

2016年3月31日
サハリン樺太史研究会

—2014 年度活動報告書—

目次

会長あいさつ

活動概要

例会・関連シンポジウム等

研究成果刊行物（付：参考資料 非会員による研究成果刊行物）

研究プロジェクト（付：参考資料 非会員による研究プロジェクト）

サハリン樺太史研究会会則・役員

報告書刊行について

本会は 2008 年 7 月に発足した。その後、例会開催、共同調査実施を重ね、さらに 2010 年には研究会誌を刊行、2011 年より公式 HP を開設し、研究会内外への発信にも力を入れるようになった。2012 年 1 月までに 2010 年度までの報告書刊行を終えたものの、それ以降は諸般の事情により作成が滞っていた。ここに 2011 年度から 2014 年度までの 4 年度分の活動報告書をまとめて刊行することとした。

2011 年度分以降では、参考資料として非会員の研究動向も日本国内限定ではあるものの掲載することとした。このことによって、日本国内のサハリン樺太史研究全体における本会の位置がより明確になろうし、また本報告書によって、完全にまでとはいかないものの、日本国内におけるサハリン樺太史研究の全体的動向を俯瞰することが可能になればと編者として願う。

なお、本報告書記載の情報の一部はインターネット上の情報を参照したものであり、若干の不正確さが残っていることがあり得ることをことわっておく。また、会員については本報告書編集時点で本会のメンバーリストに登録している者を指しており、当時は未会員であった場合もあることはご了承いただきたい。

2016 年 3 月 31 日

中山大将

（サハリン樺太史研究会公式HP運営担当者）

—会長あいさつ—

サハリン・樺太は、前近代においては先住民を担い手とした、大陸側から千島列島にいたる海を介した交易ルートの一環であり、近代には日本とロシアの接触地域をなし、両国間で何度も国境線の引き直しと大規模な人口移動が繰り返された特異な歴史を有する島です。

この島の呼称も、幕末までは「北蝦夷地」とよばれ、明治初年から「樺太」とよばれるようになり、全島ロシア領有になると「薩哈噠」の3文字が当てられました。日露戦争後の北緯 50 度以南日本領有により、ふたたび「樺太」となり、第二次世界大戦後はサハリンと呼ぶことが一般的となりました。

近年、この島に改めて歴史研究の光を当て、この島の住民が幾世代にも亘って関わった歴史的経験を捉え直そうとする機運が日本、ロシア双方で高まりつつあります。また、日本とロシアとの研究交流は、今世紀に入り、活発に行われるようになりました。たとえば、北海道大学スラブ研究センターとサハリン大学を拠点として、「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア」第 5 回研究会「サハリン・樺太の歴史」(2004 年 7 月 29 日～30 日)、同第 11 回研究会「サハリン・樺太史セミナー(Ⅰ)」(2005 年 9 月 21 日)、同第 13 回研究会「サハリン・樺太史セミナー(Ⅱ)」(2005 年 12 月 3 日)、「日本とロシアの研究者の目から見るサハリン・樺太の歴史」(2005 年 11 月 1 日～2 日、2006 年 2 月 16 日～17 日)、「国際シンポジウム：サハリンの植民の歴史的経験」(2008 年 5 月 6 日～7 日)と幾度も研究会が開催されてきました。そして 2008 年の「国際シンポジウム：サハリンの植民の歴史的経験」開催後に、シンポジウム参加者を中心に 2008 年 7 月、サハリン・樺太史研究会が発足しました(初代会長：原暉之北海道大学名誉教授)。

サハリン・樺太史研究会は、これまでの樺太史・サハリン史研究が日本、ロシアにおいて、それぞれ別個に行われてきたことを踏まえ、双方の研究成果を学ぶとともに双方の研究成果の交流、資料保存情報の交流などの研究交流を進め、「一國史」にとらわれないサハリン・樺太史を描くことを目標としています。

本会は札幌を拠点として研究会、シンポジウムを定期的に(年間 5 回程度)開催しております。これら研究会、シンポジウムは参加自由で、どなたでも参加できます。サハリン・樺太史の研究に関心をお持ちの方は、本会事務局にお知らせいただけましたら、案内メールを差し上げます。

2013 年 12 月 17 日

サハリン樺太史研究会会長 白木沢旭児(北海道大学大学院文学研究科教授)

—活動概要—

北海道大学以外での開催

本会例会はこれまでほぼ北海道大学を会場としてきたが、第30回例会は札幌大学で、第32回は函館市地域交流まちづくりセンターで行うなど、北海道大学以外での開催と同時に展示会見学会や座談会など新たな試みも行った。

北サハリン史研究の展開

原暉之氏を代表とする共同研究では、北サハリン史研究を推し進め、本年は大著『北樺太石油コンセッション』の著者村上隆氏の没後10年を記念して、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターと共同で特別研究会を開催し、この10年間の北サハリン史研究の進展の到達点と課題とを確認した。

工藤信彦氏の研究報告

全国樺太連盟の理事および会報誌『樺連情報』の編集者として、本会会員のみならず国内外のサハリン樺太史研究者と樺連との窓口として貢献して下さってきた工藤信彦氏が来札し、本会で研究報告を行ってくださった。『樺連情報』に連載された「樺太点心」は氏の企画であり、本会会員の多くも同企画を通じて樺太引揚者へ自分たちの研究成果を伝える機会を与えられた。本会会員のみならず、工藤氏を慕う教師時代の教え子各氏も研究会へ駆けつけた。

神長英輔『「北洋」の誕生』出版

本会会員の神長英輔氏が『「北洋」の誕生』を出版した。氏の専門は北洋漁業史であり、サハリン樺太よりも広い地理範囲を研究対象としているものの、当然ながらサハリン樺太も本書の中では重要な位置を占めている。漁業史が弱いと言われてきたサハリン樺太史であるだけに、貴重な研究成果である。

英文書籍の刊行

非会員であるものの本会に密接に関わって来てくださったパイチャゼ・スヴェトラナ氏がフィリップ・シートン氏とサハリン樺太史に関する論文を編み、イギリスの出版社より出版した。英語でサハリン樺太史研究の成果が刊行されたことは貴重なことである。本会会員としては、玄武岩氏や兎内勇津流氏、ジョナサン・ブル氏、中山大将も寄稿した。

ソ連占領初期南サハリン史料勉強会

兎内勇津流氏が主催により、ソ連占領初期のソ連公文書の勉強会が7月19日より始まった。ロシア史を専門としない会員らのロシア語文書利用の拡大につながる事が期待される。

—例会・関連シンポジウム等—

■第30回例会

日時:2014年6月28日

場所:札幌大学

展示観覧会:札幌大学2号館地階2003室「札幌大学埋蔵文化財展示室」

展示……………道北地区博物館等連絡協議会巡回展「樺太:知られざる北の国境」

案内……………田村将人(札幌大学)

書評会:札幌大学6号館1階6102教室

「「樺太引揚者」像の創出」『北海道・東北史研究』第9号、2014年

……………ジョナサン・ブル著(天野尚樹訳)

「「脱出」という引揚げの一方法—樺太から北海道へ」『北海道・東北史研究』第9号、2014年

……………木村由美

評者……………天野尚樹(北海道情報大学)

評者……………ジョナサン・ブル(北海道大学法学研究科)

評者……………木村由美(札幌市公文書館)

研究報告会:札幌大学6号館1階6102教室

樺太における文化活動—「郷土史」への取り組みを中心として……………鈴木仁(北海道大学大学院文学研究科)

評者……………池田裕子(東海大学札幌教養教育センター)

■第31回例会 共同特別研究会「北サハリンの歴史と現在:村上隆没後10年を記念して」

日時:2014年11月1日

場所:北海道スラブ・ユーラシア研究センター大会議室(4階403号室)

北部サハリンと『イワン・スタヘーエフ商会』の実業活動(1915~1925年)…エドワルド・パールイシェフ(筑波大学)

岡栄『サガレン日記』に見るオハ:1934-1936……………寺島敏治(元釧路市史編纂事務局・地方史研究協議会)

ラウンドテーブル:「村上隆著『北樺太石油コンセッション1925-1944』をめぐって」

発言者……………原暉之(北海道大学名誉教授)

発言者……………天野尚樹(北海道大学)

発言者……………白木沢旭児(北海道大学)

第 32 回例会

日時:2014年12月13日

場所:函館市地域交流まちづくりセンター 2階フリースペース

座談会:戦後サハリンと日ロ交流をふりかえる

話題提供 サハリン帰国者

発言者 倉田有佳(ロシア極東連邦総合大学函館校)

発言者 井潤裕(北海道大学)

発言者 中山大将(北海道大学)

第 33 回例会

日時:2015年3月14日

場所:北海道大学人文社会科学総合教育研究棟 W201 室

研究報告会

明治40年8月実施 東京地学協会主催「樺太巡検旅行」のこと 工藤信彦

書評会:中山大将『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成』京都大学学術出版会、2014年

評者 白木沢旭児(北海道大学)

評者 三木理史(奈良大学)

—研究成果刊行物—

(五十音順)

相原秀起 日口関係

【著書】

相原秀起『知られざる日露国境を歩く：樺太・択捉・北千島に刻まれた歴史』東洋書店、2015年2月。

井澗裕 建築史

【定期刊行物】

井澗裕「中村蒙堂のこと」『樺連情報』775号、2014年11月1日。

尾形芳秀 樺太ポーランド人史研究

【定期刊行物】

尾形芳秀「樺太時代のポーランド人：日本とポーランドの交流史の空白を埋めたい」『鈴谷』28号、
2015年3月。

神長英輔 漁業史

【著書】

神長英輔『「北洋」の誕生：場と人と物語』成文社、2014年12月28日。

【定期刊行物】

神長英輔「コンブから見るサハリン島の歴史」『Arctic Circle』91号、2014年6月27日。

木村由美 日本近代史

【定期刊行物】

木村由美「戦後樺太からの引揚者と北海道：都市部と炭鉱都市を中心に」『北大史学』54号、2014年
12月20日。

■玄武岩 メディア学

【論文集】

Mooam Hyun and Svetlana Paichadze, "Multi-layered Identities of Returnees in their 'Historical Homeland: Returnees from Sakhalin," in ed. Svetlana Paichadze, Philip A. Seaton, *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border: Karafuto / Sakhalin*, Routledge, 2015 年 2 月 23 日。

■塩出浩之 政治史

【定期刊行物】

塩出浩之「書評 三木理史著『移住型植民地樺太の形成』」『日本史研究』620 号、2014 年 4 月。

■白木沢旭兎 日本近代史

【定期刊行物】

白木沢旭兎「巻頭言 サハリン・樺太史研究会のいま」『北方博物館交流』27 号、2015 年 3 月。

■鈴木仁 文化史

【定期刊行物】

鈴木仁「樺太庁長官物語その(4)第十代長官縣忍」『樺連情報』768 号、2014 年 4 月 1 日。

鈴木仁「樺太庁長官物語その(5)第十四代長官小河正儀」『樺連情報』776 号、2014 年 12 月 1 日。

鈴木仁「賀川豊彦の来島と転換期の樺太」『北海道地域文化研究』7 号、2015 年 3 月。

■田村将人 アイヌ史

【定期刊行物】

田村将人「樺太＝サハリンに〈残留〉した女性の 80 年」『樺連情報』771 号、2014 年 7 月 1 日。

田村将人、鈴木建治「ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所にある樺太旧蔵書について」『北海道・東北史研究』10 号、2015 年 3 月 31 日。

■ 兎内勇津流ロシア中世史

【論文集】

Yuzuru Tonai, "Soviet Rule in South Sakhalin and the Japanese Community, 1945-9," in ed. Svetlana Paichadze, Philip A. Seaton, *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border: Karafuto / Sakhalin*, Routledge, 2015 年 2 月 23 日。

■ 中山大将農業社会史

【論文集】

Taisho Nakayama, "Japanese Society on Karafuto," in ed. Svetlana Paichadze, Philip A. Seaton, *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border: Karafuto / Sakhalin*, Routledge, 2015 年 2 月 23 日。

中山大将「サハリン島と台湾島から見る境界地域史」『2014 年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ報告論文集』、2015 年 2 月 28 日。

【定期刊行物】

中山大将「樺太の華僑華人とその引揚げ」『神戸華僑華人研究会 通訊』73 号、2014 年 7 月 15 日。

中山大将「サハリン樺太史研究会発足以後の樺太史研究の動向：三木理史『移住型植民地樺太の形成』から中山大将『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成』および〈戦後史〉へ」『近現代東北アジア地域史研究会 News letter』26 号、2014 年 12 月。

中山大将「樺太の先住者たち」『樺連情報』777 号、2015 年 1 月 1 日。

中山大将「サハリン韓人の下からの共生の模索：樺太・サハリン・韓国を生きた樺太移住韓人第二世代を中心に」『』5 号、2015 年 3 月。

■ 麓慎一日本史

【定期刊行物】

麓慎一「明治政府の対外政策：樺太・朝鮮・台湾」『東京大学史料編纂所研究紀要』52 号、2015 年 3 月。

■ ブル ジョナサン日本政治史

【論文集】

Jonathan Bull, "Occupation-era Hokkaido and the Emergence of the Karafuto Repatriate: the Role of Repatriate Leaders," in ed. Svetlana Paichadze, Philip A. Seaton, *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border: Karafuto / Sakhalin*, Routledge, 2015 年 2 月 23 日。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

■松村正直 文学史

【定期刊行物】

松村正直「出口王仁三郎と山火事」『短歌往来』2014年4,5月号。

松村正直「土岐善麿と樺太文化」『短歌往来』2014年6,7,8月号。

松村正直「下村海南と恵須取」『短歌往来』2014年9,10月号。

松村正直「斎藤茂吉と養狐場」『短歌往来』2014年11,12月号。

■三木理史 歴史地理学

【定期刊行物】

三木理史「幻の日本によるサハリン島一島支配：保障占領期南・北樺太の開発」『歴史と地理』682号、
2015年3月。

■ 参考資料 非会員による研究成果刊行物

- 【著書】柴田善雅『植民地事業持株会社論：朝鮮・南洋群島・台湾・樺太』日本経済評論社、2015 年 2 月。
- 【著書】Svetlana Paichadze, Philip A. Seaton, eds., *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border: Karafuto / Sakhalin*, Routledge, 2015 年 2 月 23 日。
- 【論文集】Svetlana Paichadze and Philip Seaton, "Introduction," in ed. Svetlana Paichadze, Philip A. Seaton, *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border: Karafuto / Sakhalin*, Routledge, 2015 年 2 月 23 日。
- 【論文集】Igor Saveliev, "Borders, Borderlands and Migration in Sakhalin and the Priamur Region: a Comparative Study," in ed. Svetlana Paichadze, Philip A. Seaton, *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border: Karafuto / Sakhalin*, Routledge, 2015 年 2 月 23 日。
- 【論文集】David Wolff, "Returning from Harbin: Northeast Asia," in ed. Svetlana Paichadze, Philip A. Seaton, *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border: Karafuto / Sakhalin*, Routledge, 2015 年 2 月 23 日。
- 【論文集】Philip Seaton, "Memories Beyond Borders: Karafuto Sites of Memory in Hokkaido," in ed. Svetlana Paichadze, Philip A. Seaton, *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border: Karafuto / Sakhalin*, Routledge, 2015 年 2 月 23 日。
- 【論文集】Masatoshi Miyashita, "Homecoming Visits to Karafuto: How Is Home (Furusato) Reconstructed After a Long Absence?," in ed. Svetlana Paichadze, Philip A. Seaton, *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border: Karafuto / Sakhalin*, Routledge, 2015 年 2 月 23 日。
- 【論文集】Yulia Din, "Dreams of Returning to the Homeland: Koreans in Karafuto and Sakhalin," in ed. Svetlana Paichadze, Philip A. Seaton, *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border: Karafuto / Sakhalin*, Routledge, 2015 年 2 月 23 日。
- 【論文集】Svetlana Paichadze, "Language, Identity and Educational Issues of 'Repatriates' from Sakhalin," in ed. Svetlana Paichadze, Philip A. Seaton, *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border: Karafuto / Sakhalin*, Routledge, 2015 年 2 月 23 日。
- 【定期刊行物】麻田雅文「スターリンの戦後極東戦略と鉄道、1944-1950 年：中国東北・北朝鮮・サハリンを事例に」『日本植民地研究』26 号、2014 年 7 月。
- 【定期刊行物】梅野正信「日本統治下中等学校の校友会雑誌にみるアジア認識：研究方法を中心に」『上越教育大学研究紀要』34 号、2015 年 3 月。
- 【定期刊行物】王琪穎「明治初期の対ロシア論：樺太問題をめぐる諸新聞の議論」『メディア史研究』36 号、2014 年 8 月。

【定期刊行物】池 炫周 直美「故郷は遠きにありて：サハリン韓人永住帰国事業を中心に」『年報公共政策学』8号、2014年5月30日。

【定期刊行物】前田孝和「旧樺太時代の神社について：併せて北方領土の神社について」『年報非文字資料研究』11号、2015年3月。

【定期刊行物】松井憲明「オハ捕虜収容所—元捕虜の記憶と党市委員会の文書などについて」『鈴谷』28号、2015年3月。

【定期刊行物】山下聖美「林芙美子のサハリン紀行(2)「大島行き：伊豆の旅から」「朝顔」から「雷鳥」まで」『日本大学芸術学部紀要』60号、2014年。

一研究プロジェクト一

(代表者五十音順)

■井澗裕…………… 建築史

[新規]井澗裕(北海道大学)「帝国日本における「北進論」の特質と影響:樺太と千島を例に」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2014-2016年。

■兎内勇津流……………ロシア中世史

[最終]兎内勇津流(北海道大学)「20世紀前半のサハリン島に関する歴史的記憶」京都大学地域研究統合情報センター「地域情報学プロジェクト」、2013-2014年度。

■中山大将……………農業社会史

[最終]中山大将(北海道大学)「日本帝国崩壊後の樺太植民地社会の変容解体過程の研究」科学研究費補助金・特別研究員奨励費、2012-2014年度。

■原暉之……………ロシア極東近現代史

[継続]原暉之(北海道大学)「サハリン(樺太)島における戦争と境界変動の現代史」科学研究費補助金・基盤研究(B)、2013-2016年度。

■参考資料……………非会員による研究プロジェクト

[継続]坂根嘉弘(広島修道大学)「日本帝国圏における戦時農業政策の比較史的研究:社会関係に着目した地域分析」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2013-2016年。

[継続]鈴木建治(北海道大学)「中世・近世アイヌ文化における内耳土鍋の考古学的研究」科学研究費補助金・若手研究(B)、2013-2015年。

[最終]柳原正治(九州大学)「近世及び近代の日本における「領域」・「国境」概念に関する統合的研究」科学研究費補助金・若手研究(B)、2011-2014年。

[継続]山下聖美(日本大学)「林芙美子文学から見る近現代アジア諸国の研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2013-2015年。

* 掲載している研究プロジェクトは、本会関係者が代表者をつとめるもののうち、サハリン樺太史関連のもののほか、周辺地域・領域をテーマにする物も含んでいる。[新規]…今年度より開始したもの。[継続]…中間年度にあたるもの。[最終]…最終年度にあたるもの。[単年]…今年度開始した単年度のもの。

サハリン・樺太史研究会会則

2011 年 5 月 28 日改正

2009 年 5 月 16 日採択

1. 本研究会はサハリン・樺太史研究会と称する。
2. 本研究会は、サハリン・樺太を対象地域とし、主として歴史分野に関する研究の促進と研究者の交流を目的とする。
3. 本研究会は、その目的を達成するために次の事業をおこなう。
 - (1) 定例研究会(例会)・シンポジウムなどの開催。
 - (2) 共同の研究・調査、およびその成果の公開。
 - (3) サハリンの大学・研究機関との交流、情報交換および共同研究の促進。
 - (4) その他本研究会の目的を達成するために適当な事業。
4. 本研究会は、サハリン・樺太の歴史に関心があり、その目的に賛同し、事業に協力する個人の会員からなる。
5. 新年度最初の例会時に総会を開催する。総会は本研究会の最高議決機関であり、総会の議決は原則として出席会員の過半数によって成立する。
6. 本研究会には次の役員をおく。

会長(1名)・副会長(1名)・事務局長(1名)。
- 7.1. 役員選出までは 4 名からなる世話人が研究会の運営にあたる。世話人は役員を互選し、総会の承認を得る。
- 7.2. 新規役員選出は、改選前年度総会において組織される役員推薦委員会が役員候補を推薦し、改選年度総会で選出する。
8. 会長は本研究会を代表し、会務を統括する。
9. 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。
10. 本研究会に事務局をおく。事務局長は会長・副会長のもとで本研究会の事務全般を担当する。
11. 役員任期は 2 年とする。ただし再任はさまたげない。
12. 本会則は 2009 年 4 月から発効する。本会則の改正は役員協議を経たのち総会の議決による。

サハリン・樺太史研究会役員

2013 年 5 月 25 日選出

会長: 白木沢旭児 (新任)
副会長: 天野尚樹 (新任: 前事務局長)
事務局長: 中山大将 (新任)

=====

サハリン樺太史研究会 2014 年度活動報告書

発行日：2016 年 3 月 31 日

編集者：中山大將

発行者：サハリン樺太史研究会

[公式 HP] <http://sakhlinkarafutohistory.com/home.html>

お問い合わせは、上記 HP の問い合わせフォームよりお願いいたします。

=====